

霊的戦いの基礎5

「あなたは合格している」

ヨハネ13章1～11節／ヨブ記1章1～12節／ガラテヤ1章1～10節／

マルコ3章28～29節

遠藤 一則 牧師

序論：

兵士になる者はみな、入隊時に検査を受けます。いわゆる徴兵検査です。第二次大戦以前の日本では、甲種合格できる男子は10人に1～2人くらいしかいませんでした。栄養状態がよくなかったんですね。私の父も身長が足らず、不合格だったそうです。

また、今の米海兵隊には体力的な基準があるそうで、腕立て60回以上、腹筋80回以上、2マイル走15分以内をこなす体力が必要だそうです。昨今の私の体力では、その半分の数値でも、体に支障をきたしてやりとげられないと思います。戦いの兵士となるためにはやはりそれなりの基準を満たさなければならないのです。日本人一億数千万人の中にクリスチャン人口はカトリック、プロテスタント含めてわずか100万人足らず。クリスチャンが主の戦いに召されていると考えるならば、100人に一人の稀少さです。そしてその中に主の兵士として召され、戦いに送り出されているのです。では一体どのような条件をクリアして私たちは主の下へと召集されたのでしょうか。

I. パウロの確信

ガラテヤ書は恵みにより、主の愛を通して、信じることで救われたということを繰り返し説いています。ということはその点についてガラテヤの教会の人々が自分たちの行いを強調するような自己欺瞞におちいつていたからこそ、パウロは必要を感じて書き送ったのだと思います。しかし、旧約を知らず、造り主なる主の概念に乏しかったガラテヤ人が自分たちで自分たちに律法を課すなどということは非現実的です。ではなぜ、そんな考えにとられたのか。おそらく彼らの中にユダヤからの信者が入ってきたのだと思います。もちろんユダヤ人信者は旧約を知り、律法もよく知っていたのでガラテヤ人にとっては「先生」状態だったのではないのでしょうか。そして、その旧約律法のライフスタイルを悪い意味で「尊敬」してしまい、結果ガラテヤ人の持っていた尊くも素朴な「信仰による救い」が色あせてしまったのです。だからこそパウロは何度も高らかに宣言し、「ガラテヤ人よ。あなたがたは信仰によって救われている。安心せよ。」と彼らに思い出させました。

パウロはガラテヤ人の救いを微塵も疑いませんでした。なぜ彼はガラテヤ人の信仰をはっきりと確証することができたのでしょうか。彼らの行いを見たからでしょうか。言葉を聞いたからでしょうか。それをはっきりさせるために罪に関する二つの側面について考えてみます。

Ⅱ. ヨブに見る旧約の報い～罪の責任をとる

旧約聖書中の有名な人物ヨブは非常に敬虔、誠実な人物でした。なにせ自分の罪に気づけばすぐ悔い改める。そればかりか、子供たちの罪についても「どこかで何か彼らがやらかしているかもしれない」といけにえを子供たちのためにも定期的にささげていました。これには罪の責任は取られなければならない、という側面がよく表れています。罪を犯せば、その報いがある。そして、その赦しのためにはいけにえ、すなわち血が絶対必要である、というのがヨブにとっての罪の清算でした。のちにユダヤ人たちには律法が与えられますが、ヨブは律法のあるなしに関わらず、罪にはいけにえが必要ということを周囲の人たちに証ししていたわけです。

Ⅲ. イエスに見る新約の贖い～罪人を受け入れる（ヨハネ 13：1～11）

イエスはそのような時代に画期的な教えをもたらしました。それは罪人さえも受け入れられる、さらに言うなら、罪人だからこそ愛される、という画期的なアイデアでした。ヨハネの13章にはイエスが弟子たちの足を洗ったという行為が出てきます。その中の特にペテロとのやり取りの中に、イエスの救いの真髓が表れてきます。「全身水浴したものはきよい」という言葉です。イエスの愛に自分をゆだねたものはもはや、イエスの家族、神の子とされています。しかもただ赦します、というだけではなく、イエスは旧約時代の罪の責任の取り方を、ご自分といういけにえによってきっちり、実行した上で、罪の赦しを宣言したのです。主の十字架によって、私たちの罪の落とし前は完全につけられたのでした。主イエスこそ、罪の責任をないがしろにせず、正しい意味で人を受け入れた方だったのです。なんという恵み、愛でしょうか。そして、今やわたしたちは何のためらいもなく、「主の兵士である」と申し開きができるのです。

Ⅳ. のろわれる者、聖霊をけがす者

さてパウロはガラテヤ人の信じた福音をおとしめる者には「のろわれるべきです」と二度も同じ口調で繰り返しています。のろわれるべき者とは誰ですか。ガラテヤ人から救いの確証を奪った者たちです。ここで言えばユダヤからやってきて旧約の知識をひけらかし、律法を少しばかりやったことのある見栄えのいいばかり者たち、現代で言えば、「あなたがたはまだ修行が足りません。私のような行いをしていますか。聖書をしっかり研究し、考えていますか。」といい、素朴な信仰者たちを見下す人たちでしょうか。確かに立派な行いはすばらしい、しかし、それを救いと結びつけた瞬間から、競争が始まります。際限のない行いの品評会が繰り返されます。この教会はよい、あの教会はたりない。私のしたことはあの人よりよい、でもこの人はもっとよいことをしている。謙遜には見えますが、その裏にはぎらぎらした自己義認と傲慢が透けて見えてきます。パウロはこのような者たちがすぐにはわかったのです。自分もそうだったから。

結論：

最後にキリストの心を考えたいのですが、パウロを通してガラテヤの人たちを擁護するとともにキリストは何を思っておられるのでしょうか。キリストはユダヤから来た人々をどう思ってたのでしょうか。聖書には「のろわれるべきです」とはあるが、「愛されていない」とは書いてありません。主は当然ガラテヤ人を愛しています。しかし、それ以上にここで非難されている者たちこそ、救われてほしいと願っているのではないのでしょうか。そして十字架上でこのように言われました。「父よ、彼らをお赦してください。自分で何をしているのかわからないのです。」

パウロも厳しい言葉を投げかけながら、自らがそこから救い出されたことを思い出しているのです。そして、働きを続けていきました。私たちも同じです。このキリストの心を思うとき、わたしたちの心は大きく、強く動かされるのです。